

千葉大学法経学部 同窓会報

第23号

2013年6月15日発行



目次

厚生労働大臣に田村 憲久氏 初入閣	1
夢を追って～OB仕事物語り～	2・3
生まれ育った千葉市のまちづくり/変化を続ける経理・財務/ 新しく楽しい未来への「学び」	
サークル紹介	3
多方面で活躍される卒業生	4
クローズアップキャリア 「いつも心に太陽を！」	5・6
大学トピックス	6
コラム 「国際交流に携わって」	7・8
思い出&近況報告 「働ける歓びとやりがい」	9
Information ～同窓会だより～	10
同窓会総会のご案内	11
編集後記	11

発行

千葉大学法経学部同窓会

〒263-8522

千葉市稲毛区弥生町1-33

FAX 043-290-3655

ホームページアドレス

<http://chiba-u-le-dousou.jp/>

厚生労働大臣に

田村 憲久氏 初入閣



千葉大学法経学部卒業生の皆さん、こんにちは。

現在衆議院議員として6期目に入り、昨年12月より第2次安倍内閣の下で厚生労働大臣を務めさせていた田村憲久です。

地元三重の高校を卒業して、千葉大学法経学部経済学科に入学し、西千葉キャンパスに通いだしたの、もう30年前になります。

卒業後地元の三重県に戻り、建設会社に勤務していましたが、当時の政治の閉塞感に不安を抱き、地方に押し寄せる過疎化の波に、自分にも何かできないかと感じる毎日でした。そんな時、衆議院議員だった伯父から政治に携わってみないかと話があり、自分なりに社会の矛盾に取り組みしてみたいと思った私は、平成8年衆議

院選挙に挑戦し、皆様のご支援を賜り、衆議院議員としての活動をスタートしました。

議員になって初めて取り組んだのが社会保障関連法案だったこともありましたが、自分の中で政治の一番の目的は、国民が健康で幸せな生活を送ることができるようになることであり、厚生労働問題を国会議員のライフワークとして取り組んで参りました。

社会の価値観が変わる中、少子高齢化が進み、厳しい財政事情を抱えていますので、医療・年金・雇用など、どれも難問ぞろいですが、矛盾への挑戦を今後も続け、国民が安心安全に暮らすことのできる社会を構築できるように、努力邁進していきたいと思います。

同窓会の皆さまも、大学を卒業後社会人となったり、家庭を持つたりされていることでしょう。それぞれ立場は違いますが、同じ西千葉キャンパスで学んだ者として、それぞれの場所での輝き、活躍されることを心からお祈り申し上げます。

田村 憲久氏 (たむらのりひさ) プロフィール

生年月日 昭和 39 年 12 月 15 日生

座右の銘 我以外皆我師

出身地 三重県

趣味 柔道・空手・登山・相撲・テニス・ゴルフ・読書・将棋

衆議院議員 三重 4 区 (当選 6 回)

家族構成 妻、子 1 人

略 式

昭和63年3月 千葉大学法経学部卒業
 平成6年11月 衆議院議員田村元 秘書
 8年10月 衆議院議員当選(第41回)
 12年6月 衆議院議員当選(第42回)
 14年1月 厚生労働大臣政務官
 15年9月 文部科学大臣政務官
 11月 衆議院議員当選(第43回)
 16年10月 自由民主党政務調査会厚生労働部会長
 17年9月 衆議院議員当選(第44回)
 11月 衆議院議院運営委員会理事
 11月 自由民主党副幹事長

平成18年9月 総務副大臣
 19年10月 衆議院厚生労働委員会理事
 10月 自由民主党社会保障制度調査会会長代理
 20年9月 衆議院厚生労働委員長
 21年8月 衆議院議員当選(第45回)
 21年10月 自由民主党政務調査会副会長
 22年9月 自由民主党政務調査会厚生労働部会長
 10月 衆議院厚生労働委員会理事
 24年12月 衆議院議員当選(第46回)
 12月 厚生労働大臣



生まれ育った
千葉市のまちづくり



増田 由一
(昭和54年卒)

現千葉市都市局参事兼都市総務課長

私が入学した当時の西千葉駅は、まだ平面交差の対面式ホーム。大学側から西友側へ行く近道

は、入場券を買って駅の中を通るといふものでした。大学のゼミ活動では、地元千葉青年会議所の方々が企画していた「開かれた大学」というイベント、今でいう公開講座のようなものをお手伝いしていた記憶があります。

生まれも育ちも千葉市だったために、地元に残るのいいかと受験したのが千葉市役所でした。地元を良くすることができると納めた税金が自分のところに給与として戻ってくるということから「元が取れる」と考えていたので

教育委員会を振り出しに、主に都市計画の分野の仕事に携わってきました。県や国の組織に派遣されて研修を重ねるとともに、建物の誘導や規制のための土地利用計画や市内の公園管理、ジェフ千葉の誘致やホームタウン推進などにもかかわらせていただきました。卒業してからの約30年を振り返ってみれば、千葉市のまちづくりという夢の途中に立っているところです。



変化を続ける経理・財務



神山 隆雄
(昭和54年卒)

在学中は村山元英先生にご指導いただき、卒業後キッコーマン株式会社に入社、5年目に営業から

経理に移りました。経理部に異動した当時はエクセルも無く、そろばんが現役でしたが、それからの経理部門の変化は激しいものでした。システム化に始まり、特に課長になった2000年ごろから連結重視、時価会計、減損、内部統制、IFRSなど、変化が常態という感じでした。また経理部門の役割も事務処理部門としての役割からトップへの参謀としての役割が増え、一方で間接部門としてスリム化が求められています。

経理・財務は重要な部門です。大変なことは大変ですが自分としては変化と流動を結構楽しんでいきます。

在学中に経営学科で学んだこと、特に村山先生にご指導いただいたことは自分が企業人として生きる上での根幹となっています。(会計財務の勉強をやっておけばもう少し楽だったとは今思いますが)

またゼミの同期やサークル(少林寺拳法部にいました)の仲間との交流は自分が社会人になる基礎を作ってくれたと思います。在学中の皆さんも大いに学び、充実した学生生活を送られることを願っています。

新しく楽しい
未来への「学び」



景山 泰考
(平成15年卒)

MOOCsという言葉をご存じでしょうか。Massive open online courseの略で、WEB上で自由に視聴、参加できる多数の講義のこ

とです。最近、北米の大学を中心に広まり運営されています。基本的な講義は、無料で参加することが出来ます。ウェブ技術をベースにして作られており、ビデオ、テキスト、スライドを交え講義を受けるだけでなく、知識確認のための試験問題などを受けることも出来ます。もちろん、生徒同士のコミュニケーション活動も、この上で行われます。この大きな流れは、10年以上前にMITから始まり、多様なやり方により、世界中に広まり続けています。今、私は、そのopen coursewareの国際学会に参加をする道中で、マレーシア、クアラ Lumpur 国際空港にて、バリ島への乗り換え便を待ちながら、この原稿を書いています。

私の大学時代を振り返ると、インターネットの普及の走りの時期で、大企業に就職するという絶対的な価値観が少しずつ崩れ始めたころだったと記憶しています。自身の新しいモノ好きな性格もあり、授業への出席もそこそこに、新しい価値を生み出すモノたちを調べ試していました。法経学部法学科を卒業し、ニューヨークのアートスクールへの留学をへて、ナショナルクラリアントと共に

ウェブを構築する会社に参加しました。現在は、フリーランスのウェブのアーティストレクターをしながら、ITと教育に関わるベンチャー、キャスタリアにて新しい学びをつくりだすサービスを作ろうとしています。そのサービスは、人が日頃、何気なく行っていることから、学びを取り出して、蓄積するサービスや、会社などのグループの中での知識研修をより自由におこなえるようなサービスを作っています。

学びは、私達の人生の中で、高等教育までで終わるものでなく、一生切っけは切り離せないことだと考えています。その中で、大学の学びは、高校までの基礎をベースに、より社会と結びつくようなものが多かった様に思います。現在の学生の志向は、より就職に近い授業を求める傾向があると聞いています。少しもったいななと思うのは、私だけでしょうか。Connecting the dotsという言葉があります。iPhoneを世に生み出したapple社 Steve Jobsの言葉です。いま目の前にあるモノに集中して取り組む、その結果、取り組んだ点と点が人生のあるタイミングで結ばれる。つまり、自分の

人生をもっと真剣に楽しんで取り組んでいくことが、一人の人間の頭の中にイメージ出来るキャリアパスを遙かに超える、新しく楽しい未来がみえるということをしてこの

言葉は教えてくれていると思えます。日本の将来を変える学びが生まれることに、一石でも投じる事ができればとおもいつつ、今後とも邁進していく所存です。



サークル紹介

千葉大学には現在178団体の公認サークルがあります。同窓生の皆さんも大学生活の中でサークルに所属していた方が多いのではないのでしょうか。現役生より現在のサークル活動をご紹介します！

vol.1 WINDFALL

こんにちは。WINDFALL3年生の住本純也です。WINDFALLは学部生約50人からなる、今年で33年目となるテニスサークルです。

主な活動内容は、週に1回の大学のテニスコートでのテニスの練習と年に4回の合宿、千葉大学内でのテニスサークルの大会への出場、また、その季節ごとに、BBQやキャンプ、納涼船や富士急、スノーボードといったようなさまざまなイベントを企画しています。

このサークルは、大学までテニスをしたことのない人が多く、練習も体育会のような厳しいものではないため、初心者やテニスをしたことがない人でも、気負いすることなくテニスを楽しんでいます。

また、このサークルのもっとも大きな特徴は、先ほど挙げたような合宿やイベントに多くのOB・OGの先輩方が参加して下さるといことだと思います。中には、一回り以上年の離れた先輩にも関わらず顔を出して下さる先輩もおり、そのような方と一緒にスポーツをしたり、お話を聞きながらお酒を飲んだりできるということは、サークルをやっている僕たちにとってはとても嬉しく、このサークルの誇れることの1つだと思います。

多方面で活躍される卒業生

アンカンミンカン 富所 哲平



法経学部法学科二〇〇六年卒業、富所哲平と申します。僕は、千葉大学を卒業後、NSCという吉本興業のお笑い学校に入学し、

現在も、群馬県を活動の拠点として、お笑い芸人をやっています。吉本興業が創業百周年を記念して、全国47都道府県に芸人を配置し、各地域から日本を元気にしようというプロジェクト、その名も「あなたの街に住みますプロジェクト」。そのプロジェクトに選ばれ、4年活動した東京を離れ、幸か不幸か、二〇一一年五月より、地元である群馬県に実際に住み、川島大輔という幼なじみとコンビを組んで、アンカンミンカンという名前で活動しています。

遅刻・欠席をしたりすると、即刻クビになります。抜き打ちの口臭チェックでひっかかるとクビなんてこともありました。今思えば、1年中誰かしらが、クビを免れるために坊主頭で懺悔の校舎清掃作業をしていました。改めて大学生活と比べて考えると、あのNSC在学期間は本当に現実だったのかどうか疑わしいです。余談ですが、卒業寸前でポカをしたアンカンミンカンは卒業の許可が下りずクビになり、当時、東京NSCがあった西大井の町内清掃を二人揃って3ヶ月間毎日やって、さらには神保町へのNSCの引越しのお手伝いをして、ようやく芸人としてのスタートを切ることができました。

群馬県で活動し始めて、少しずつ県内では認知して頂けるようになりましたが、変わらずに今も圧倒的に一番多い質問は、「あなたたちは誰ですか?」です。アンポントンでも、アカンミカンでも、なんでんかんでんでもありません。アンカンミンカンです。

最後に、このようなアピールの場を設けて頂いて感謝です。千葉大学の名を汚さぬように、しっかりと売れるまでは千葉大学卒業を必要以上に表に出さないように気をつけますので、同窓生にこんな奴もいるぞって事を頭の片隅にでも置いて頂けたら幸いです。

か不幸か、二〇一一年五月より、地元である群馬県に実際に住み、川島大輔という幼なじみとコンビを組んで、アンカンミンカンという名前で活動しています。「どうやってお笑い芸人になったの?」なんて質問をよく頂くので、その辺のお話をさせて頂こうかなと思います。

入学初日から、まるで軍隊のような規律・秩序の下で、実に様々なことを奇抜な講師陣から学びます。サンングラスをかけて竹刀を持った先生、なぜかいつも裸足の先生、機嫌が悪いと途中で帰ってしまう先生、たまに酔っ払っている先生。NSCの授業は、ネタ見せ、集団コント、大喜利などのお笑いの授業から、発声や感情表現の授業、そしてなぜかダンスの授業が2つもありました。ヒップホップダンスが上手に踊れてなくて怒られた日々は、今でも不思議に思っています。

ギャグのトーナメント大会があったり、集団コントの練習で待ち合わせて自分一人しか集まらなかったり、奇声をあげながら部屋の角から角までを全力疾走したり、色々なことがありました。

そんなNSCは、挨拶・返事をきちんとできなかつたり、無断で

卒業を迎えるときにはたくさんいた同期も半分以下になってしましますが、ここからお笑い芸人1年目がスタートするわけです。飛び込んだ芸人の世界。よくライブのギャラが500円なんて笑い話がありますが、スタートしたて頃のライブではギャラがもらえるだけいい方で、もらえても50円で、そこから源泉引かれて45円。給与明細の郵送代の方が高つくつじやねえか、なんてこともあるのがほんとに若手芸人の世界です。



富所哲平さん (写真右)

クローズアップ キャリア いつも心に 太陽を!



越川 剛

(平成5年卒)

金融庁に勤務致しております越川と申します。私は平成10年6月に、当庁の前身である金融監督庁が発足した時から、こちらで勤務致しております。以後およそ15年にわたり、庁内の様々な業務を経験させて頂きました。今回は現在の部署と、その直前に配属となっておりました部署の業務を紹介させて頂いて頂こうと思っております。

私は現在、総務企画局総務課国際室という部署で、課長補佐を拝命致しております。当室に関する機構定員要求、予算概算要求、人事、服務、政策評価、外国出張命令決裁の作成等、総務全般の業務

を担当しております。当室の業務は、簡単に一言で申しますと、各国の金融監督当局の代表と、様々な国際会議の場において交渉等を行うことです。皆さん、例えば自己資本比率という言葉聞いたことがありませんでしょうか。銀行が保有する総資産のうち、万が一の場合に貸倒れの可能性がある資産等に対して、資本金等の自己資本がどれくらいあるかを示す指標のことです。この自己資本比率を例

として申し上げますと、現在、国際統一基準行（海外営業拠点を有する金融機関）においては最低所要自己資本比率8%、国内基準行（海外営業拠点を有しない金融機関）においては最低所要自己資本比率4%を保持するよう、銀行法で義務付けられています。それではここで言う8%やら4%やらという数字は、どのように決まってくるのかと申しますと、バーゼル銀行監督委員会という組織が公表する合意文書が、その元となります。この組織は、G20諸国を中心とした中央銀行及び金融監督当局

の代表により構成されています。親委員会の他に、いくつもの委員会や作業部会があり、我が国からは日銀及び当庁の担当者が主にイスのバーゼルで行われる会議に実際に赴き、議論を行っております。また最近では、電話会議も頻繁に行われています。そして議論を重ね、各国の代表が意見のすり合わせを行いながら、合意文書は出来上がっていきます。議論は段階を経て行われており、一九八八年、最初の国際的な銀行の自己資本比率に関する合意（バーゼルI）がなされました。その後、総

リスク資産の一定比率の算出の方法等について様々な議論が行われ、二〇〇四年六月にはリスクの計測手法をより精緻化する等したバーゼルII最終文書が公表されました。現在では更に一歩進んで、国際的に業務を展開している銀行の自己資本の質と量の更なる見直しを柱としたバーゼルIIIについての議論が行われています。今後、持続的な経済成長の阻害とならぬよう、経過措置を設けた上で段階的に実施されていく予定であり、数年後の完全実施に向けた取り組みがなされているところです。そして最終的に公表された合意文書の内容が、国内法に反映され

ていくという仕組みになっています。因みに国内法への反映作業は、銀行分野について申し上げますと、当庁の総務企画局企画課という部署に行っております。

上記は、いわゆるBIS規制を例として申し上げましたのですが、この他に、証券分野では証券監督者国際機構（IOSCO）、保険分野では保険監督者国際機構（IAIS）が、上記の銀行分野で申し上げます。そして同じように、当室のそれぞれの担当者がそれぞれの国際会議に赴き（あるいは電話会議等に應對し）、証券分野で申し上げます自己資本規制比率、保険分野で申し上げますソルベンシー・マージン比率の見直し等にかかる国際会議に参加し、議論を重ねています。また、国際財務報告基準（IFRS）についての議論に参加するため、当庁の職員が国際会計基準審議会（IASB）に出張する機会も増えています。

G20財務大臣・中央銀行総裁会議への参加のための準備も、大切な業務です。その他、マネー・ロンドンリングにかかる国際交渉に、警察庁や財務省、外務省の担当者と共に赴く者もおります。英国や

米国等の財務・金融当局と、二国間で協議を行う、いわゆる二国間財務金融協議を担当している者もおります。政務3役(大臣、副大臣、大臣政務官)や長官が海外出張に赴かれる際の準備作業も、当室の大切な業務の一つです。また最近では、TPP(環太平洋パートナーシップ協定)交渉に関する対応も、重要な業務です。

国際室に配属となる直前は、およそ2年間、検査局総務課で、外資系金融機関在日支店、地方銀行の立入検査に従事しておりました。1つの検査チームの中でリスク・カテゴリーごとに担当者が分かれ、銀行のそれぞれの担当の方々と議論を行いながら検証を進めていきます。私は主に経営管理態勢、信用リスク管理態勢、内部監査、オペレーショナルリスク管理態勢等を担当させて頂きました。検証は、金融検査マニュアルの内容がもちろん中心となりますが、実際の議論は、各銀行のビジネスモデルや経営状況等によって変わってきます。特に外資系ですと、そもそも日本の金融市場を念頭に置いて、どのようなビジネスモデルを打ち出しているのか、そして海外にある本店からの指示が、我が国の法律(銀行法、金融

商品取引法等)を遵守したものと なっているかについて、検証を行います。そして融資の際の審査をどのように行ったか、債務者が仮にデフォルトした時の損失率やリスク・ウェイトの計算方法等についてもお話を伺います。また、私が直近で入ったある地方銀行への立入検査の時は住宅ローンを担当させて頂いたのですが、平成21年12月に、時限措置としていわゆる中小企業金融円滑化法が施行されたことを受け、返済条件変更への対応状況等についてもお話を伺う機会を得ました。(同法は、平成25年3月末日をもって、期限を迎えました。)

議論はお互い納得がいくまで行います。ただ、実際に金融機関の方々と議論をしていて感じたことは、その銀行の経営の健全性を確保し少しでも高めていくこと、そして顧客の利便性の向上を図ること等、結局お互い向かおうとするところは一緒なのです。ですので、仮に当庁から何らかの指摘をさせて頂いた場合であっても、金融機関の担当者の方々の話し合いの中から、ある一定の方向性で結論がついた時は、喜びも一入ですし、大きなやりがいを感じる瞬間でもあります。

いろいろと述べて参りましたが、海外当局との国際交渉にしても、金融機関の方々の議論にしても、共通して言える大切なことは、当方の意見(考え)を事前にしつかりと準備して議論(交渉)に臨むこと、そして情熱を持って、真剣に臨むことではないかと思えます。そのためには、常に前向きに、気持ち明るく持つて仕事に取り組む姿勢が、とても大事であると思えます。最後に、後輩の方々へ一言。社

会に出ると、確かに多くの勉強しなければならぬことや、また時には辛いこともあるかと思えます。しかし、それ以上に仕事のやりがいや醍醐味を感じることができる機会にも、必ず恵まれます。そして、そこには皆さんが学生時代には感じることもなかったおもしろさがあります! 今後、学部、院を問わず、千葉大学を卒業(修了)された方々と一緒に働ける機会が得られたならば、これ以上の慶びはありません。

大学トピックス

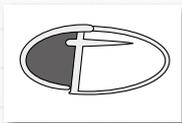


千葉大学における国際化の方針を受けグローバルに対応し、国際的に千葉大学とわかる新たなコミュニケーションマークを設ける公募を行い、応募総数91点の中から本学工学部デザイン学科4年瀧山愛さんの作品が採用さ

れました。

このマークは千葉大学から世界に活躍できるよう飛躍するイメージが表れており、現在のマークと同じ赤を使用することにより伝統を、地球や空を連想させるスカイブルーでグローバルなイメージ、9つの赤い部分は現在の9学部を表現しています。

ちなみに・・・



長きに亘り、千葉大学のシンボルマークとして使用されてきた左記のマークはコミュニケーションマークの誕生により、千葉大学の学章として制定されました。



扇山 徹

(昭和60年卒)

香港から帰国したばかりの小学校6年生の娘を連れて、久し振りに西千葉のキャンパスへ行った。3月末であったが今年は桜の開花が例年より早く、ちょうど満開であった。キャンパスには大学に合格したばかりの新生らしき学生を何人か見かけたが、皆きよろきよろしながらも希望に満ち溢れた明るい顔で歩いていた。

今から、もう32年前のことである。胸をときめかせながらこの満開の桜の下を歩き、これから何をしようかと色々と考えていたあの頃の自分と重ね合わせてみた。体育会硬式庭球部に入部し、球拾いとランニングに明けくれ、リーグ戦の勝ち負けで一喜一憂した。また3年生から武蔵武彦先生・伊東光晴先生のゼミに入れていただいた。著名な二人の先生方の授業は大変面白く、今でも時々思い出することがある。デイベイトを初め

国際交流に携わって

て経験したり、先生の別荘に泊まりで勉強したりしたことも懐かしい。

硬式庭球部顧問の深尾謹之介先生にも大変お世話になった。深尾先生との関わりで米国のアラバマ州立大学へ短期留学する機会にも恵まれた。アラバマ州のタスカルーサという小さな街の中に大学のキャンパスがあり、その中の寮で生活した。昼食時のカフェテリアでは、2メーターを超える長身の黒人のバスケット選手達が日本人の3倍位の食事とコーラを次々にピクアップしている姿に圧倒されたり、すれ違う女子学生が皆笑顔でハイイ！と微笑んで挨拶してくるのに戸惑ったりして、毎日が新鮮な驚きの連続であった。大学の日本語クラスに講師として招待され、日本についての講話をしたこともあった。この時の海外生活がきっかけとなり、将来は日本にとどまらず海外へ出て、異文化に接しながら「国際交流」のような仕事をしたいと強く思うようになり、航空会社に入社した。

社会人になってからは、幸いにも海外出張や海外駐在をする機会に多く恵まれた。29歳の時にフランスへ駐在することとなった。トゥールというパリから少し離れた街で英語をほとんど話せないフランス人家庭にホームステイして、フランス語学校に通った。私は全くフランス語を話せず、学生時代にフランス語を真面目に勉強しなかったことを心から悔んだ。

登校初日の帰宅時に迷子になったり、授業で宿題が出されたことを理解出来ず、周囲の友達から英語でそつと教えてもらったりと最初の1ヶ月間は本当に大変だった。また夕食の時間が一番苦痛で、フランス人の家族が何を話しているのが全くわからず、皆が談笑する中、一人うつむいて黙々と食べていた。これではだめだと思い、早朝から深夜までフランス語の文法書を片手にひたすら勉強したが、語学は簡単には上達しないものだ。そもそも「フランス語を話せない学生にフランス語の文法をフランス語だけで説明しても全く理解出来ない。」という気持ちもあり、焦燥感にさいなまされる毎日だった。しかしながら不思議なことに3ヶ月位たった頃、毎朝BGMのように流していたラジ

オのニュースで「サッカーの試合でどこかのチームが勝った」という内容がふとわかった瞬間があった。この時を境にフランス語が単なる音楽のような音の流れのようなものから、区切られた単語として聞こえるようになってきたことを今でもよく覚えている。

そして半年後にパリへ引っ越し、シャルルドゴール空港で仕事を始めた。多くのフランス人はバカンス(長い休暇)を楽しみ、バカンスを生活の中心に設計して暮らしていた。夏のバカンスシーズンになると職場の多くのスタッフが長期旅行に出掛けてしまうため、業務が滞ってしまうようなことがあり、仕事の面では苦労することも多かったが、「今の生活を大切にする」というフランス人の考え方は、大変新鮮なものに感じた。フランス人の同僚には大変親切にしてもらい、20年を過ぎた今でも親交が続いている。

2年間の充実したフランス生活が終わって帰国してから、今度はタイのバンコクに駐在することになった。バンコクではタイ人客室乗務員の採用、教育訓練、日本語教育を企画実施する仕事をした。タイは「微笑みの国」と言われて

おり、採用した客室乗務員は皆とても優しい笑顔の持ち主であった。しかしながら日本へ行ったことがなく、日本文化や日本人の氣質を知らない乗務員が多かったので、日本人のお客さまへのサービス技量の観点から日本をもっと知ってもらふ必要があると考え、

日本の上司の家を訪問する「ホームビジット」をアレンジした。玄關で靴を脱ぐ習慣に戸惑い、畳の部屋に驚き、電車の切符を改札機から取り忘れ・・・といった具合に、彼女達には異国である日本での様々な経験をしてもらい、少しずつ日本文化を学んでもらった。逆に私も彼女達からタイの生活習慣を色々教えてもらった。弱者を大切にする心や、「マイペンライ(気にしない)」という明るさ・・・お互いの国のことを教えあうことで、日本とタイとの小さな国際文化交流が出来た思いがした。

3年弱のバンコク駐在を終え帰国し、羽田空港、本社での企画業務を経て、二〇〇八年末から3度目の海外駐在となる香港へ赴任することとなった。香港は大変治安のよい街で重大犯罪率は東京の6割程度だそうだ。中華料理は美味

しいし、医療レベルも高く、学校の教育レベルも非常に高いことから香港は日本人駐在員の中でも人気の都市である。

私の家族も香港の生活が大変気に入った様子であった。子供たちはインターナショナルスクールへ通い、英語と中国語で授業を受け、多くの友達が出来た。その学校の運動会は色々な国籍の子供達が入りまじり、さながら「ジュニアオリンピック」のようで面白かった。

仕事の面では、香港の経済界から歓迎され、日本と香港との航空運輸業の歴史の深さを肌で感じた。戦後まもない頃、私の勤める会社が日本のナショナルフラッグキャリアとして香港をアジアの拠点とした運輸を開始して以来、日本と香港との間の密接な関係が今日まで続いているのだ。

この長い航空の歴史の中、香港での日本の国際交流活動は官民で色々実施されてきたが、その中でも20年以上続いていた「スカイスクール」という企画は日本企業による香港社会への貢献という意味で大変意義のあるイベントであった。それは経済的余裕のない家庭の香港人小学生を毎年集めた招待飛行であり、私の勤務する航空会社が単独で長年企画・実施し

ているものであった。香港空港を離陸して、香港の街の上を40分程遊覧飛行して、香港空港に再び戻るという大変短い時間の飛行ではあったが、毎年多くの小学生から飛行機に乗りたいという希望があり、抽選になってしまう程の大人気のイベントであった。このイベントには十数名の日本人学校の小学生も一緒に参加するのだが、かつて参加した日本人小学生の一人がパイロットになったそうで、いつの日か彼にスカイスクールの機長として遊覧飛行してもらいたいと考えている。このイベントは香港では毎年テレビ放映され、多くの香港人が知っている。まさに日本と香港との間の大切な国際交流の一つである。

私は3年半の香港駐在を終え、昨年帰国した。現在は羽田空港の国際線ターミナルで、お客さまに素晴らしい旅をしていたくためのお手伝いをさせていたが、空港は学生時代に夢見た「国際交流」が日々実践出来る舞台であり、こうやって空港で仕事が出来ることが大変幸せなことである。

若い世代の人達には日本から一度は飛び出して、色々な価値観を

学んできてほしいと思つているが、もし私が羽田空港でそのお手伝いをさせていただければこの上ない喜びである。

まだ少し寒さが残る午後、久しぶりに見る千葉大の美しい桜はしばし時が経つのを忘れさせてくれた。若い頃に夢見た「国際交流」に今まで色々な形で関わることが出来たことは本当に幸せであり、そしてこれからも関わっていきたいと思う。

時折強く吹く風に桜の花びらが舞い踊る中、今までサポートしてくださった先生方や友人の顔が思い浮かび、感謝の気持ちで一杯になった。そして今こうして隣を一緒に歩いている娘にも感謝したくなった。彼女が千葉大学教育学部付属小学校に入学してくれたお蔭でこれから私も西千葉キャンパスを時々訪れることになるだろう。これも幸せなことである。





思い出&近況報告

働ける喜びとやりがい

郡司 孝夫

(昭和43年卒)

●ペンチャーズ時代

大学2〜3年生時は「ドルフィンズ」なるバンドを編成して、エレキバンドに狂っていました。西千葉キャンパスばかりでなく医学部や稲毛寮まで出かけ、ペケペケの毎日。本来の学業に勤しむ時間はとてありませんでした。

●生きている証拠

45年後の今年3月20日(春分の日)早朝、激しい腹痛のため目が覚めた。前夜の飲み過ぎのためだろうと、あまり気にもしなかったが、時間が経つにつれて益々痛みがひどくなり、10時頃には七転八倒！救急車にお世話になる始末。診断の結果、尿管結石と判明。10年程前にも一度胃痙攣で救急病院に運ばれたことがあったが、医者は「痛いということは生きている証拠」と冷酷なものであ

る。それにしても「激痛」の伴う病気に時々襲われる体質・・・次は何が起こるか？

●孤独な生活

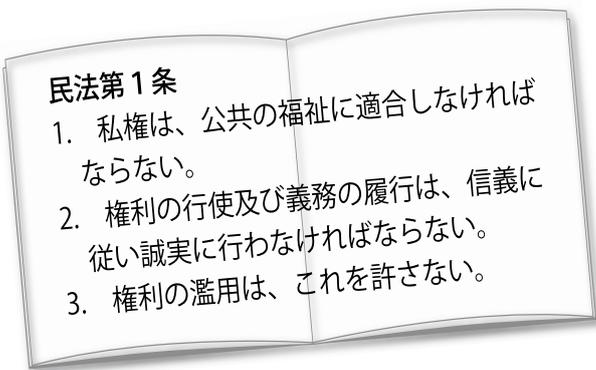
一年半前に千葉大学が縁で結ばれた妻に先立たれた。大学卒業後すぐに一緒になり、子供の頃を除いては一人暮らしの経験のない身。辛くないと言えば嘘になるが、寡夫暮らしにも慣れた今日この頃である。ただ、家の中でTV以外の音や声が全くない生活は楽しいものではない。孤独死という言葉が時々脳裏をかすめる環境でもある。

●60歳の手習い

私は昔から「何もしないでボソッとしていた」のが嫌いな性格。50の手習いならぬ60の手習いで得た資格で昨年からマンション管理士の仕事をしています。

昭和30年代から日本に登場したマンション。今では、全国に570万戸もあり、首都圏では実

に2割前後の人々がマンションで生活するようになっていきます。しかしながら、この「共同生活」の場では日々トラブルが絶えませんが、老朽化による建て替え問題、管理費等の滞納問題、騒音やペット問題、タバコの問題等々。トラブルの大半は、お互いが民法第1条を理解し、社会人として生活していれば解決するのですが・・・そこで私どもの出番となるわけですが、商売の観点からはまだまだニッチマーケットです。ともあれ、生身の生活者と毎日顔を合わせて仕事ができるという事は、大きな喜びでもあり、健康でいられる間は続けようと思っています。



民法第1条

1. 私権は、公共の福祉に適合しなければならぬ。
2. 権利の行使及び義務の履行は、信義に従い誠実に行わなければならない。
3. 権利の濫用は、これを許さない。

同総会賛助金

同総会賛助金のご協力有難うございます。会報21号で平成23年7月末までの御協力者のお名前を掲載いたしました。平成23年8月から平成25年3月末までに賛助金をお寄せいただいた方々は次の通りです。年次別、敬称略。

- 昭31年 居作至高 篠田哲彦
- 33年 渋谷敏夫 難波徹也
- 34年 植野正明 手塚 宏
- 35年 篠崎昭宏 鈴木大明
- 田中知行 渡邊啓吉
- 38年 土田宏昭 和久井良裕
- 39年 井上忠之
- 41年 大柳正男
- 44年 金子準二 深谷俊正
- 矢口 孝
- 45年 根本誠一 47年 山中敏廣
- 50年 鈴木 貴 51年 鶴山則昭
- 52年 清水忠昭 53年 平林伸夫
- 54年 杉澤 宏 57年 齋藤賢哉
- 63年 石川岳志 小林正則
- 湊 広志
- 平4年 杉本直樹
- 5年 上田祐子 安永憲浩
- 6年 中川 学 7年 内田和宏
- 10年 齋藤和弥 20年 山本順一
- 以上35名の方から総額25万円のご協力をいただきました。心より御礼申し上げます。



平成24年度
同窓会総会開催

平成24年7月14日(土)千葉大学西千葉キャンパス・人文社会科学研究棟マルチメディア講義室で千葉大学法経学部同窓会総会が開催されました。

記念講演では、昭和34年、文理学部卒業の天野 平八郎氏より「高速道路料金制度への提言と東北の生産基盤強化」というタイトルの講演していただきました。

今の高速道路の平均利用価格は七〇〇円未満であり利用率は13%であることや、ドイツ、アメリカ他に比べ利用率が圧倒的に低いこと。たとえば一〇〇〇円の定額に

すれば、高速道路黒字を維持できて、さらに利用率が高まり(＝定額なので長距離乗る)一般道の渋滞も緩和され経済も発展する、など大変参考になるお話をいただきました。



講演をする天野平八郎氏

平成24年度
千葉大学校友会開催

平成24年10月27日(土)千葉大学けやき会館大ホールにて校友会総会が開催されました。当同窓会を代表し吉永会長が出席しました。

この総会に伴って発行された「千葉大学校友会報」に、当学部昭和53年卒業であり同窓会理事でもあられるの渡邊誠吾氏の「人生七転び八起き」が掲載されました。

西千葉音楽祭

平成24年度11月25日(金)西千葉音楽祭が開催されました。主催するのは、住所地名にない西千葉の名前にこだわり文化を発信しよう、という趣旨で、平成21年に発足した「スポーツとアートの会」。

松尾貴臣氏(平成14年千葉大学法経学部卒、平成18年千葉大学大学院(経済)卒)の提案で今年より「西千葉音楽祭」に名称変更され、一般参加者をつのり、よさこい踊り、千葉大のサッカー場やバスケット場で各種目ゲーム遊びなど盛況のうちに幕を閉じました。

理事役員一覧

役職	氏名	卒業年
会長	吉永英明	S39
副会長	渡部靖征	S43
理事	澁谷敏夫	S33
〃	藤崎吉彦	S44
〃	鈴木幸男	S43
〃	吉野聡	S44
〃	片山隆明	S47
〃	飯笹伸一郎	S47
〃	八代伸久	S48
〃	山田善一	S51
〃	渡邊誠吾	S53
〃	萩原博樹	S53
〃	石橋秀樹	S56
監事	岩出誠	S48
〃	川村敦	H01
学内理事	大塚成男	
顧問	押尾公人	S35
〃	松田忠三	

(平成24年度7月現在)

千葉大学
イルミネーションイベント

今年は、太陽光発電で充電して、LEDライトを点灯させたイルミネーションイベント。写真は大学院の倉阪秀史先生が撮影されました。「燦然と輝く母校」を感じられて、千葉大卒業で本当によかった、と思わせてくれます。何か、大学行きたくなってきました。



同窓会総会

平成25年度同窓会総会を下記のとおり開催致します。
会員の皆様の多数の参加をお待ちしております。

日時 **平成25年7月20日(土)**

受付開始 12:10～
総会 13:00～
記念講演 14:00～
懇親会 15:30～

記念講演 **「持続可能な社会づくり
—地域振興と震災復興から考える」**

横浜国立大学大学院環境情報研究院 特任准教授

小林 正典 氏 (平成元年卒)

会場 総会・講演会 **人文社会科学棟2階
マルチメディア講義室**

懇親会 **けやき会館1階コルサ**

懇親会
参加費 **3,000円**

※当日総会受付の際お支払いください。

お手数ですが準備の都合上、同窓会総会及び懇親会の出席・欠席について、Fax又はEメールにて7月10日(水)まで、同窓会事務局宛にご連絡いただくようお願い申し上げます。
なお、当日の参加も歓迎致します。その際には、名札用の名刺を1枚ご持参ください。
また、住所等の変更のあった方は、併せてご連絡をお願い致します。

FAX番号 043-290-3655 (ご氏名・卒業年度を入れてお願い致します。)

Eメール dosokai@le.chiba-u.ac.jp (件名は『同窓会』でお願い致します。)

同窓会への お便り・情報 を募集

皆様の近況報告、誌面への掲載希望や紹介、クラス会・OB会の報告など何でも結構です。
お気軽に同窓会事務局までお寄せください。

千葉大学法経学部同窓会事務局 FAX 043-290-3655
Eメール dosokai@le.chiba-u.ac.jp

編集後記

多数の方々のご協力を得て、第23号も無事刊行に至りました。

寄稿していただいたみなさまに心より御礼申し上げます。

特に今号は厚生労働大臣の田村憲久氏より出稿していただき、誌面が大変充実したものであります。ご尽力頂きました児山秀幸さんありがとうございます。

また、表紙写真をご提供頂きました渋谷敏夫さんありがとうございます。

お寄せいただきました寄稿文も多種多様なラインナップで、大変読み応えのある会報になったと編集委員一同喜んでおります。これからも様々な角度から「千葉大学法経学部」を同窓会会員の皆様にお伝えしていきたいと思っております。

同窓会会員数も一万三千人を超え一年一年、色々と変化が生じるものと思います。

今後も皆様の近況や随想、思い出、ご意見・・・なんでも構いませんので、ご寄稿いただければ幸いです。なお大学構内の写真などもぜひお寄せください。お待ちしております。

(編集委員)